

Title	近代デザインのモラル
Author(s)	天貝, 義教
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53518
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

近代デザインのモラル

天貝義教／秋田公立美術工芸短期大学

1 応用美術からデザインへ

近代デザインの歴史を「応用美術からデザインへ」という変化としてみる時、近代デザインの理念は応用美術の考えから脱却したといわれている。これについては、建築美学からデザイン美学へと思考を深めていった阿部公正氏の論考が理解を深める手がかりになる。氏のデザイン美学の確立への思いは、「建築美学」(1959)にみることができ、応用美術についての考察は、「『応用美術』の概念について」(1986)にみることができる。

氏によれば、「応用美術としての工芸は、機械生産の発達とともに、産業工芸ないし量産工芸へ、そして広義の工業デザインあるいは産業デザインへとその様相を変えてきた」のであり、この変化のなかで、「実用的な物に装飾を付加することによってはじめてその物を美的なものへと高めることができる、という考えからの脱却が示される」のである。この応用美術から脱却した考えが近代デザインの理念と呼べるものであり、一般には、バウハウスの「芸術と技術の統一」という理念に代表され、機能主義に結びついているといわれている。これについて、阿部氏は、「芸術と非芸術の間」(1963)で、機能主義的な考え方の根底には、外部からではなく内部から形態を決めてゆく思考法があり、デザイン思考の本質を機能論理に見いだすことの重要性を強調した。同時に、「形は機能に従う」というモットーが、「機能論理への深い反省」なしに、「近代デザインの旗じるしとして唯一の芸術原理」として容易に考えられることを厳しく批判した。しかしながら、阿部

氏のデザイン論では、ラスキンの建築観が応用美術の問題とともに「芸術と技術の統一」の問題にかかわっていることに注意しなければならない。

2 応用美術の意義

阿部氏は、「『応用美術』の概念について」のなかで、『建築の七燈』において語られたラスキンのいわゆる芸術的建築観が、応用美術において装飾と芸術性を同一視する考えを普及させたことは否めないと指摘した。ここに、応用美術のひとつの典型的な考えをみることができるが、また十九世紀後半のヨーロッパの応用美術の考えが明治初期に日本に導入されたことも見逃せない。それは「多様な技術的進歩に対する美的秩序の付与」と意義づけられるものであり、その内容は、ドイツ語でクンストゲヴェルベと呼ばれた分野にかかわるものであった。そこでは、機械製であれ手工作によるものであれ実用と美が結びついた製品について、過去の美術様式を模範とする装飾美は否定されないものの、その形態が実用にもとづかねばならないこと、形態が装飾よりも優先されること、装飾をもたない形態美のあることが強調されていた。

「応用美術からデザインへ」というとき、このような応用美術の思想が明治初期に日本に導入されていたことを忘れてはならない。

3 近代デザインのモラル

「芸術と技術の統一」とラスキンの建築観との関係は、近代デザインのモラルの問題としてとらえられる。ラスキンは、『建築の七

燈』において、「最小の値を以て最大の結果を生み出そうと願う現代の一般の感情」のもとでの「安っぽい現代の教会堂」の「仮装」と「虚飾」を痛烈に批判し、「慰安なき尊敬されざる住宅」への悲痛の眼差を書きしめた。そして鉄を構造材として認容せず、鑄鉄の装飾を忌避し、自由な手細工を奨励して、美は凡て自然の形態の法則に導かれる、と主張した。このような考えを、阿部氏は、「現代デザインの理念」(1964)で、機械生産の排斥と手仕事の賛美を特徴とするものだとしながら、デザインについての非近代的な考え方のひとつの典型であると指摘した。その一方で、氏は、ラスキンとともにモリスの考えが、芸術を労働の所産としてとらえるものであり、工業文明の問題に対するひとつの重要な示唆を与えるものとして、「モリスが労働と芸術との関係において考えた芸術は、当然工芸や建築のような実用芸術——今日のデザイン——なのであるから、われわれもまたモリスとともに商業のために奴隷とされた労働ではなく、なす価値があり、それをすることが愉快でもあるような労働によって、民衆のための芸術が実現されるような状態を夢みることは必ずしも不当ではないだろう」と強調した。阿部氏がこう記すのは、デザインの理念が社会的なものとして深くかかわり合わなければならないという思いからであり、こうしたデザインの社会性が近代デザイン理念を特徴づけることを見逃せない。阿部氏は、「バウハウス運動を考える」(1975)で、「芸術と技術」の問題についてのグロピウスの意図には、「近代技術のもつ社会的側面への配慮が欠けているのではないだろうか」と疑問を提出し、芸術と技術との関係をモラルの問題としてとらえた。

「建築と美術」(1981)において、阿部氏は、建築と芸術の関係について、現代建築が、

「科学技術の要請する原理」と「芸術の秩序原理」とを結び合わせたことを強調しながらも、こうしたアプローチには形式主義へと陥る危険性のあることを指摘するとともに、今日のマス・コミュニケーションの時代における人びとの欲求が「操作された欲求」となり、「本当の欲求は抑圧されたままになっている」ことに注意を促して、つぎのように建築のモラルに言及した。「建築は、それをつくる専門家とそれを使う素人の共同によって出来上がるものだとすれば、そのさい、建築家は素人の、操作された欲求にこたえるのではなく、本当の欲求にこたえるのでなければならない。それは建築のモラルだともいえる。」

阿部氏の用語法からすれば、ここでの建築はデザインと読みかえることができ、これはデザインのモラルを語ったものでもある。氏が、その「建築美学」において引用したダゴベルト・フライによれば、建築は「芸術的に形成された現実」であり、それは、「われわれの生活機能に対する空間を形づくること」であった。フライの定義によれば、工芸を含むこうした広い意味での建築にとっては、「目的への奉仕 (Einem-Zwecke-Dienen)」が決定的な役割を持つ。この「目的への奉仕」の概念については、デザインの本質規定にかかわるものとして再確認する必要があるだろう。そのうえで、「応用美術からデザインへ」という歴史的变化をみなければならぬ。なぜなら、応用美術から脱却した近代デザインの理念は、「多様な技術的進歩」「多様な社会的変化」そして「美的秩序」の統一的結合をめざす形成活動を実践的かつ倫理的に意義づけるものでなければならないからである。